

2011年
5月16日
月曜日

藤井英次 教授（国際経済学）

国際貿易と人間

世界の国々は実に多様であり、その経済構造も其々に特徴を有した不均質なものである。そしてそれらの国々が互いの生産物を売買することを国際貿易と呼ぶ。国際貿易は太古の昔から存在するが、なぜ国と国は貿易を行うのかを考えることは意義深い。それは国際経済学の研究対象として重要なだけでなく、グローバル化の時代や社会を生き抜く我々一人一人にとって深遠な示唆に満ちているからである。

皆さんには何をやっても良くできる友人がいるだろうか。勉強もスポーツもよく出来る人気者で、何をやっても自分は到底適わないというような人。そしてそんな人と比較して、「自分は劣っているのでは」と溜息をつくことはないだろうか。特に昨今の厳しい就職状況下では「自分には何か他者よりも優れたものがあるだろうか、自分は一体何に向い

ているのだろうか」と悩むこともあるかもしれない。

実は経済学者が国際貿易について考察する際、これと類似した問題を考える。例えば一方に工業も農業も非常に生産性の高い国が存在し、他方に両部門共に生産性の低い国があるとすると。この場合、両者は貿易をすべきか、また仮に貿易をすれば前者が一方的に恩恵を受け、後者はより貧しくなるのかという問題である。

個人に得意・不得意があるように、国にも生産を比較的得意とするものとそうでないものが存在する。例えば日本は自動車の生産は得意だが、原油の生産は得意ではない。中東の産油国はその逆である。この場合、両国において自動車と原油の両方を生産するよりも、各々が得意な部門の生産に特化し、互いに貿易するほうが効率的だということとは容易

に理解できる。

では、仮に一方の国がもう一方よりも全部門において生産性が高いとした場合、優れた国は全てを自ら生産し、他国とは貿易しない方が良いだろうか。経済学が示す答えは否である。その理由は、例えばどのほど生産性の高い国であっても、その国が有する資源（労働力や資本など）には限りがあるという点に凝縮される。このため全てにおいて生産性に優る国であっても、より得意な部門に資源を集中的に配分し、他部門については多国に生産してもらって互いに貿易する方がより効率的に製品を手にすることが出来るのである。

裏返せば、全ての部門において生産性に劣る国であっても、その中では比較的生産性が高い部門に資源を配分し、貿易を行うことで自らの経済厚生を高めることができる。

個人の生活においても、我々は通

常一つの職業に専念し、その他については他者に任せて互いに生産したものを売買している。何事にも優れているからといって、全てを自ら生産する人はいない。どれほど豊かな国であってもそこに存在する資源には限りがあるように、どれほど優れた人にとっても1日は24時間しかなく命は有限である。

このように考えると、国の場合も個人の場合もdiversity（多様性）とは実に素晴らしいことだと気づかされる。絶対的水準において他者よりも劣っているものがあることは決して敗者であることを意味しない。同様に多くの事柄において他者よりも優れている人であっても、他者との関係の中で互いの貢献を活用し共存することが結局は自分自身のためになるということを経済学は教えてくれる。